

聖書が戦争について
教えていること



聖書が戦争について教えること

はじめに

私たちは今や21世紀の半ばを過ぎた。世界の情勢は急速に悪化している。私たちが信頼してきた人々、知り、楽しみ、さらには当たり前だと思っていたものさえも、消え去りつつある。今日の世界では、多くの人々が絶え間ない恐怖の中で生きている。世界の緊張がかつてないほど高まっていることを、私たちは目の当たりにしている。紛争、戦争、そしてテロ行為が、今や新聞の見出しやニュース報道を埋め尽くしている。

世界は狂乱の渦に巻き込まれており、多くの人々が自らの生存そのものを危惧するに至っています。同時に、わが国や世界の他の地域では、愛国心への新たな高まりが見られます。こうした状況ゆえに、かつては考えられなかったような新たな同盟を結ぶべく、国々とその国民が結束しつつあります。

善と悪とされる勢力間の闘争が進行中です。武装への呼びかけがあり、その結果、暴力は暴力で報いられる事態となっています。個人に対しては、いかなる犠牲を払っても「戦いに加わる」よう、多大な圧力がかけられています。

人類は概して、神に助けを求めるのではなく、自らの手段によって世界に平和をもたらそうとしています。このような状況下で、神の子供たちは多くの重要な決断を迫られています。聖書（
）は、暴力、戦争、殺戮について何を教えているのでしょうか？いかなる形態の戦争にも反対する宗教的良心的兵役拒否者となるための根拠として、聖書はどのように活用できるのでしょうか？この小冊子が、読者の皆様がこれらの重要な問いに対する答えを見つけの一助となることを願っています。

旧約聖書における戦争観

聖書では、神はしばしば「神の怒り」や「神の憤り」（民数記11:10,23参照）といった、戦いを連想させる言葉で描かれています。天の父は、不純なあらゆるものに強く反対しておられ、それらは遅かれ早かれ滅ぼされることとなります。神は「焼き尽くす火」のようで、「生ける神の御手に落ちることは恐ろしいこと」だからです。

（申命記4:24；ヘブル人への手紙10:31）。「復讐はわたしのもの、報いはわたしのもの。」（申命記32:35）。聖書はまた、神は罪を見過ごすことができないとも教えています。「あなたの目は清く、悪を見ることはできず、不正を容認することはできません。」
（ハバクク書

1:13）。主は御自分の民を裁き、御目の前で悪を行う者たちを試される。主は「嫉妬深い神」であり、「戦いの神」であり、定められた時に従って諸国を

聖書が戦争について教えていること

裁くために立ち上がられるからである。—出エジプト記 20:5; 15:3

主は、これまで人類の世界との関わりにおいてそうしてこられ、将来もまた、定められた結末に至るまで、ご自身の計画と御旨を成し遂げられる。主は、私たちのすべての愛情、確信、そして信頼を求めておられる。

これは私たちのためであり、神の側の利己心ではないということ、私たちは悟らなければならない。同時に、神の嫉妬は公正であり、罪人に必ずや正当な罰をもたらすものである。墮落した人間は、アダムの子による定罪から生じる苦々しさ、恨み、そして利己心をもって神を見つめている。

イスラエルの戦士たち

神がイスラエルの民と交わされた御業について語り始めるにあたり、彼らが軍団ごとに人口調査を行うよう命じられていたことがわかります。「イスラエル人がエジプトから出てきてから二年目の二月一日、主はシナイの荒野にある会幕でモーセに語りかけ、こう言われた。『イスラエルの全会衆を、氏族と家系ごとに数え、一人ひとりの男の名を書き記せ。あなたとアロンは、軍務に就くことのできる二十歳以上のイスラエルのすべての男子を、その部隊ごとに数えなさい。』」—民数記1:1-3

イスラエル人は、約束の地を征服するための戦いの際、しばしば軍人たちに率いられた。「軍の長」（

ヨシュア記5:14)であるヨシュアは、エリコを滅ぼす方法について天使から指示を受けた。ラッパの響きと神の介入により、城壁は「平らに崩れ落ち」、完全に「破壊された」。(ヨシュア記6:1-

21)。また、サムソンの経験にも注目しよう。律法によれば、サムソンは神の非常に忠実な僕と評価されていた。彼の忠実さは、神の要求、神の大義、そして神の契約の民であるイスラエルに対する忠誠心にあった。

しかしイスラエル人は、サムソンと協力してパレスチナの地を神の所有として主張し、すべての敵を打ち倒す代わりに、そうすることができませんでした。彼らはペリシテ人を恐れ、神への信仰がほとんどなかったのです。

神はご自分の民に戦う方法を教えられた。ダビデはこう語っている。「わが岩、主をほめたたえよ。主はわが

手を戦いに、わが指を戦いに備えさせてくださる。わが慈しみ、わが要塞、わが高い塔、わが救い主、わが盾、わが避難所。主はわが民をわが下に服従させてくださる。」(詩篇144:1)

イスラエルは多くの戦いに臨むことになった。神は彼らに戦い方さえも教えられた。「わが岩、主をほめたたえよ。主はわが手を戦いに、わが指を戦いに備えさせてくださる。」(詩篇144:1)。神は彼らを戦いに送り出された。

「主はモーセに言われた。『イスラエルの子らをミ

聖書が戦争について教えていること

ディアン人の手から救い出せ。……モーセは民に告げて言った。「あなたがたの中から戦いに備えて武装する者を集め、ミディアン人に向かって行かせよ。……イスラエルの各部族から千人ずつを戦いに送り出せ。……そして彼らはミディアンの王たちを殺した。」」民数記31:1-8

神は御自分の民のために戦われる

イスラエルの民がエジプトの王ファラオとその馬や戦車からなる軍勢に追われていた時、神は民のために戦われた。「ファラオが近づいてくると、イスラエルの民は目を上げて見ると、見よ、エジプト人が彼らを追って進軍していた。彼らは非常に恐れ、イスラエルの民は主に叫び求めた。

……モーセは民に言った。『恐れてはならない。ただ立ち止まって、主が今日、あなたがたに与える救いを見よ。今日あなたがたが見ているエジプト人は、二度と見ることはない。主があなたがたのために戦われる。あなたがたはただ静かにしていればよい。』」（出エジプト記14:10-

14）。神の力によって海の水が割れ、イスラエルの軍勢は救い出された。

すべての事には時がある

検討すべきもう一つの聖句は、伝道の書3章1節、3節、8節にある。「天の下には、すべての事には時があり、すべての目的には時がある。……殺す時があり、癒やす時がある。壊す時があり、建てる時がある

。……愛する時があり、憎む時がある。戦う時があり、平和の時がある。」

多くの人々が、これらの聖句を殺戮や戦争を正当化するために用いてきました。しかし、これを詳しく検討してみると、ソロモンが自身の多くの経験と観察に基づいて書いていることがわかります。彼は社会的な観点から論点を提示しています。彼は人々が富を蓄えるために懸命に働いているのを見て、賢明にもこう問いかけます。「労働者はその労苦から何を得るのか？」（伝道の書3章9節）

ソロモンはこの議論を次のように締めくくっている。「神を恐れ、その戒めを守れ。これこそが人の全き義務である。神は、すべての行い、また隠されたこと、それが善であれ悪であれ、すべてを裁きに付されるからである。」伝道の書 12:13,14

愛の神

ここで一つの問いを投げかけましょう。「もし神が聖書が教えているように愛の神であるなら、なぜイスラエルの民に対して敵を徹底的に滅ぼすよう命じられたのか、どうすれば理解できるのでしょうか？」

この問いに対する答えは次の通りです。私たちは、イスラエルの民が神の契約の民であり、「地のすべての氏族のうち、わたしが知っているのはあなたたちだけである」

（アモス書3:2）。イスラエルが約束の地カナンに定住した当時、その地には悲惨な状況が広がっていま

聖書が戦争について教えていること

した。その地を占領していたペリシテ人やアモリ人らは、事実上
な野蛮人であり、あらゆる形態の偶像崇拜にふけり、偽りの神々や宗教に関連して人身供犠を行っていました。

彼らの邪悪さと墮落がそのような段階に達していたため、神はその英知と正義に基づき、彼らを滅ぼし、その地には神の教えの下で高度な文明を築く民を置くことが最善であると見なされたのである。ユダヤ人がその地に入ろうとした時、主は彼らに対して律法の体系を定め、もし従わなければ罰せられることを確約された。

その一つが、「殺してはならない」（出エジプト記20:13）という戒めでした。悪意、憎しみ、怒りは、殺意に満ちた精神に由来するものです。

イスラエルの子らが神の選民であるという事実は、聖書の中で非常に明確に教えられている。「地のすべての氏族のうち、わたしが知ったのはあなたたちだけである。」エレミヤ書13章11節の言葉を眺めてみよう。

「腰に帯を締めるように、わたしはイスラエルのすべての民とユダのすべての民を、わたしの名と誉れと栄光のために、わたしの民として、わたしに結びつけた。」と主は言われる。神は「イスラエルのすべての氏族の神」である（エレミヤ31:1）。「あなたを通して……地のすべての氏族は祝福を受ける。」（創世記28:14）

イスラエルの隣国は絶えずイスラエルと戦いを挑みましたが、もしイスラエルが神に従うならば、神は彼らを助けられました。もし彼らが神に背くならば、神は敵に勝利を許されました。神は預言者たちを通して、悪、憎しみ、戦争、貧困に満ちた現在の状況は一時的なものであることをイスラエルに明らかにされました。神の計画は、あらゆる戦争、憎しみ、絶望、貧困を根絶することを目的としていました

。これは、神の王国が確立された時に実現するものでした。

このように、神は選ばれた民に対して、極めて特別な方法と、特別な律法や状況の下で接しておられたことがわかります。神が彼らに与えられた「殺してはならない」という戒めを思い出しましょう。議論を進めていく中で、新約聖書における主の教えによれば、命は尊重されるべきものであり、危険にさらされてはならないということが明らかになるでしょう。

新約聖書における戦争観

新約聖書における神の教えを学ぶにつれ、変化が生じたことがすぐに明らかになるでしょう。天の父は今やイスラエルの民に対して異なる扱いをしており、そのすべては御子から始まっています。主は天の御家を離れ、完全な人間として生まれました。「初めに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は

聖書が戦争について教えていること

神であった。（ヨハネ1:1）

「御言葉は肉となり、私たちの間に住まわれた。（私たちは、父の独り子としての栄光、すなわち、恵みと真理に満ちたその栄光を見た。）……彼は世におられたが、世は彼によって造られたのに、世は彼を知らなかった。彼は自分のものの中に来られたが、自分のものは彼を受け入れなかった。」

（ヨハネ1:14,10,11）。「自分の民」とは、イスラエルの民を指すことを私たちは知っている。彼は、「彼は人々に軽んじられ、見捨てられた。苦難の人である」という聖書の言葉が成就して、彼らに拒絶されたのである。イザヤ53:3

ピラトが、主の裁判に集まっていたユダヤ人たちに、「では、キリストと呼ばれるイエスを、どうすべきか。

」と尋ねたとき、彼らは皆、「十字架につけよ」と言った。

（マタイによる福音書27章22節）。この記述の結末にあるように、ピラトは彼に何の罪も見出せず、この件から手を引いた。「すると、民衆は皆、声をあげて言った。『その血の責任は、私たちと私たちの子孫にあるように。』」マタイによる福音書27章25節

主の宣教の全期間を通じて、主はイスラエルを助けたいと切に願っておられた。「ああ、エルサレム、エルサレム。預言者を殺し、あなたに遣わされた者たちを石打ちにする者よ。鶏がひなを翼の下に集め

るように、何度でも、わたしはあなたの子供たちを集めたかったのに、あなたはそれを拒んだ。見よ、あなたの家は荒れ果てたまま、あなたに任されることになる。」

（ルカ13:34,35）。これはイエスの証しの一部である。神の独り子に対するこの拒絶ゆえに、イスラエルは長年求めてきたものを得ることができなかった。彼らは神の導きの下で、絶え間ない祝福と繁栄を得ようとしていたのだ。

「では、どうなのか。イスラエルは求めているものを得ていない。……（『神は彼らに眠りの霊を与え、見ない目と、聞かない耳を与えられた』と書かれているとおり）今日に至るまで。」ローマ人への手紙 11:7,8

私たちに教訓を与える例

ここで再び、聖書を用いて、旧約聖書における神とイスラエルとの関係の目的について述べます。「兄弟たちよ、あなたがたに知っておいていただきたいのですが、私たちの先祖は皆、雲の下にいて、皆、海を渡りました。……これらのことは、私たちにとっての模範であり、彼らが悪しきものを欲したように、私たちもそれを欲してはならないという目的のためでした。」（コリント人への手紙第一 10:1-6）。

この記録から、私たちはこれらの警告を受け、それと共にそこから学ぶ機会を与えられています。そうすることで、神に仕えるために最善を尽くすことが

聖書が戦争について教えていること

できるのです。肉によるイスラエルは、アブラハムに与えられた約束のいかなる部分についても、無条件の相続人ではありませんでした。「あなたによって、地上のすべての民が祝福を受けるであろう。」

(創世記12:3)。また、彼らは、約束の最も重要な部分である霊的な部分についても、国民として相続人ではなかった。神がイスラエルと契約を結ばれた際、彼らが律法を守れば永遠の命を得られるという理解であった。そうすれば、彼らは地上のすべての氏族、すなわちすべての人々を祝福するという特権を相続することができたのである。

神の約束の相続人

使徒ペテロの「この約束は、あなたがたとその子孫に対するものです」(使徒行伝2:39)という言葉は、イスラエルに対する主のすべての御業、そして主のしもべアブラハムの子孫としての彼らとの契約と完全に一致しています。パウロが「これは、私たちの十二部族が、昼も夜も熱心に神に仕えながら、成就されることを待ち望んでいる約束です」

(使徒26:7)。イスラエル人がアブラハムの契約の相続人となるにふさわしくないことが証明されたとき、彼らは切り離され、異邦人がその代わりとして接ぎ木されました。これらの異邦人は、今や個人として、「オリーブの木の根と肥沃さ」の分け前を受けることができるようになりました。(ローマ11:17)。

キリストを受け入れた者だけが、霊的な子孫の一員

として、「約束による相続人」とされたのである。
 (ガラテヤ3:29)。これは、すでに説明したように、イスラエルの不忠実さから生じた結果である。「な建築者たちが拒んだ石が、今や隅の親石となった。……神の国はあなたがたから取り去られ、適切な実を結ぶ国民に与えられる。」

(マタイによる福音書21:42,43)。イスラエルは、他の諸国を祝福するために神に用いられる準備ができていなかったため、彼らの型としての義は終わり、王権の約束も彼らのものとはならなくなった。それは「ある国民」、すなわち霊的なイスラエル、「聖なる国民、神の所有の民」に「与えられた」のである。
 (ペテロの手紙一

2:9)。この国民は他のすべての国民とは区別され、地上のあらゆる民の中から集められたものであると告げられている。この国民には奴隷も自由人も含まれる。まことに、主は「御名の民」を召されたからである。(使徒行伝15:14)。この点をさらに明らかにする以下の聖句にも注目されたい。「異邦人はその御名を信賴する。」

(マタイ12:21)。「キリストの御名を呼ぶ者は皆、不義から離れなさい。」(テモテへの手紙第二2:19)。「もしだれでもわたしに従いたいなら、自分を捨て、毎日自分の十字架を負い、わたしに従いなさい。」(ルカ9:23)。「あなたがたを暗闇から、その驚くべき光の中へと招いてくださった方の栄光を現しなさい。」
 (ペテロの手紙一

聖書が戦争について教えていること

2:9)。「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える。」(ヨハネの黙示録 2:10)

暴力と戦争の拒絶

主イエス・キリストこそ、新約聖書に示されている教えの変化の鍵であることは間違いありません。イエスは、世の中で知られ、受け入れられてきた暴力や戦争という概念を拒絶されました。イエスは、ご自身の教えと模範を通して、私たちに父なる神の御心を知る道を示してくださいました。

「わたしはあなたがたに新しい戒めを与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。あなたがたが互いに愛し合うなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が知るようになる。」(ヨハネ13:34,35)。これは、律法の契約の下でユダヤ人に与えられたものよりも、より高い戒めであり、より高い律法です。

私たちはキリスト・イエスにある律法の下にあります。このキリストにある律法は、私たちの契約の律法であり、愛の律法です。それは、キリストの学校に入り、教会の会員となることを望んでいるすべての人々に、私たちの頭である方によって与えられています。互いに愛し合うということは、隣人、兄弟姉妹、そして天の父を愛することを意味します。それは、私たちの時間や才能を捧げ、主に仕えるためにすべてを犠牲にすることさえ含意しています。

「もしあなたがたがわたしを愛するなら、わたしの戒めを守るべきです。」（ヨハネ14:15）。私たちは、愛に満ちた従順が父を喜ばせるものであり、それは正義だけでなく、愛によっても示されるべきであることを悟らなければなりません。それは私たちを「いのちの御霊の律法」に従うように導くはずです。ローマ人への手紙8:2

主は模範を示されました。主は日々の生活を通して、ご自身の心に真に何があるかを示されたのです。これこそが真の律法の遵守であり、パウロがローマ人への手紙で述べている律法の義です。私たちは主の足跡をたどり、私たちの心を父なる神の御霊と調和させたいと願っています。神は、私たちの心の意図が正しくあり、可能な限り肉を制御することを望んでおられます。

私たちは神の御心に完全に身を委ね、自分の人生を主に捧げ、肉の弱さを追い求めないことを願っています。また、教えを受け入れ、主から学び、ひいては父なる神についてさらに深く知ることを願っています。「わたしの父がわたしに教えてくださったのです」と、主はヨハネによる福音書8章28節で言われています。

「もしあなたがたがわたしの言葉にとどまるなら、あなたがたはわたしの弟子である。そして、真理を知り、真理はあなたがたを自由にする。」ヨハネ8:31,32

罪に起因する暴力は、今日の世界で猛威を振るっています。それは多くの形態をとり、多くの文化に及

聖書が戦争について教えていること

んでいます。罪の元凶であるサタンは、「ほえたける獅子のように、...誰かを食い尽くそうとして」世界中を彷徨っています（ペテロの手紙一5:8）。彼は「この世の神」であり、「信じない人々の心を盲目にしています」

（Ⅱコリント4:4）。この影響により、暴力は常態化してしまいました。それは、近隣住民との日常的なトラブル、学校や職場での問題、さらには国家間の紛争といった形をとっているかもしれません。

私たちは、これが主の教えに反することを知っています。聖書は、主が暴力や、争いを解決するための個人的な武力行使を拒まれたことを示しています。マタイによる福音書26章51～53節で、イエスは、大祭司の僕に対して剣を抜いたペテロを戒め、その結果、そのうちのひとりが負傷しました。イエスは、自ら進んで彼らに捕らえられなければならないことを知っておられました。イエスは弟子たちに、「剣を鞘に納めなさい」と言われました。

その後、弟子たちが主に仕えるために力や暴力を使ったという話は二度と出てきません。イエスは「天使の軍勢」を呼び寄せることができたはずですが、そうはされませんでした。ご自身の安楽のために神の力を使うことを望まれなかったのです。

イエスは、苦難からの救いを祈ることは決してなく、犠牲の一部として喜んで耐え忍ばれました。私たちもまた、自分の人生において同じことをすべきです。自分の意志を脇に置き、いかなる代償を払っても神の御心を行うべきです。「キリスト・イエスに

あるのと同じ心を、あなたがたの中にも持ちなさい。」 フィリピの信徒への手紙 2:5

敵に対する新しい態度

主はまた、敵に対する新しい態度についても説かれました。「わたしはあなたがたに言います。敵を愛し、あなたがたをののしる者を祝福し、あなたがたを憎む者に善を行い、あなたがたを侮辱し、迫害する者のために祈りなさい。」（マタイ5:44）

最初は、これほど高い基準を満たすのは難しいと思うかもしれませんが、その通りです。この種の愛は、隣人を愛することを超えています。私たちを愛してくれる人を愛するのは簡単だと言われます。しかし、敵を愛するためには、ことわざにあるように広い心を持ち、すべての人に寛大でなければなりません。それは、敵でさえも私たちの心に悪意をかき立てることのできないほど、愛に満ちた心の状態を意味します。

そこには報復や憎しみの余地はありません。それは、私たちが悪や不正を好むということでも、それに加担するという意味でもありません。私たちは、弱く無力な者を虐げる者たちには反対します。今日の世界の考え方は、自己を救い、利己的な利益のために他者に害を与えることにあります。私たちは「悪を憎み、善を愛さなければならない」のです。

（アモス書5:15）。主を忠実に歩む者たちにとって、これはすべて極めて重要なことです。これは、私たちの信仰を実践に移す一例です。それは、あなた

が心を尽くして主を「愛する」ことを示す道です。
(マタイによる福音書22:37)。また、神の御前で罪を犯し悪を行う者には、その報いがあることも覚えておきましょう。コリントの信徒への手紙一3:8

人生の原則

私たちの主イエスは、柔和さと平和を築くことを特徴とする生き方の原則を私たちに教えてくださいました。「霊に貧しい者は幸いである。……嘆き悲しむ者は幸いである。……柔和な者は幸いである。……義に飢え渴く者は幸いである。……憐れみ深い者は幸いである。……心の清い者は幸いである。彼らは神を見るからである。

平和をつくる者は幸いである。彼らは神の子と呼ばれるからである。」(マタイによる福音書5章1-12節)。主は、弟子たち、ひいては私たちを教えるために、山上の説教の中でこれらの言葉を語られました。私たちは主の御心に従順であり、教えを受け入れる姿勢を持つべきです。

主は、私たちが自制心を持ち、柔和であり、容易に怒ったり苛立ったりしないことを望んでおられます。また、他者の不親切な行いに対しても、憐れみと真の赦しを実践することを望んでおられます。私たちの行いが常に完璧であるとは限りませんが、その意図は完璧であるべきです。私たちは平和をつくる者、平和を愛する者となり、他者を助ける機会を捉えるべきです。主の民は、すべての人と共感し、争

いの絶えないこの世において、いかなる側にも加担してはなりません。

神に対する心の清さは、平和を愛する願いと、他者の平和を促進しようとする努力として現れます。これは、私たちが生きているこの時代、すなわち現在の邪悪な世界において、特に真実です。闇が光を憎むのは事実であり、義の敵は、父に喜ばれる人生を歩もうとする人々を憎み、迫害するでしょう。

主は、義の原則に忠実であり、それを実践する人々を求めておられます。これは、敵から迫害を受ける時でさえ、敵に対して行うべきことです。「わたしのために、あなたがたがののしられ、迫害され、偽ってあらゆる悪口を言われるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい……天におけるあなたがたの報いは大きいからである。」

(マタイ5:11,12)。また、ペテロの手紙第一4:16には、「もしだれかがキリスト者であるために苦難を受けるなら、それを恥じる必要はない。むしろ、神をあがめなさい。」と記されています。主はさらに、「あなたがたは、この世で苦難に会う。しかし、勇気を出しなさい。わたしはこの世に打ち勝った。」(ヨハネ16:33)と語ることで、私たちにさらなる確信を与えてくださいます。

新約聖書の教えにおける責任

私たちは地上の巡礼者であり、寄留者であるべきです。これは、私たちが人の律法ではなく、神の律法

聖書が戦争について教えていること

に対して責任を負っていることを意味します。このことに関して与えられている戒めを見てください。

「あなたがたは、選ばれた種族、王なる祭司、聖なる国民、神の所有となった民です。それは、あなたがたを暗闇から、その驚くべき光の中へと招き出された方の栄光を、あなたがたが宣べ伝えるためです

。……

愛する者たちよ。あなたがたが旅人であり寄留者であることを心に留め、魂と戦いを交える肉の情欲を避け、品行方正な生活を送るようにと、私は懇願します。」（ペテロの手紙一 2:9-11）。神の律法と矛盾しない限り、私たちは人の律法に従わなければなりません。

天の父が御自身の御心への従順を極めて重要な事柄としておられることは、私たち皆が知っています。これは、イスラエルの民に関して示されてきたすべての教訓によって、私たちに明らかにされています。また、主も次のように言われたとき、このことについて私たちに教訓を与えてくださいました。「それゆえ、カエサルのはカエサルに返し、神のものは神に返しなさい。」（マタイによる福音書22:21）。

聖書研究者の主張は、彼らの市民権は天にあるということであり、天の主に従うことによって、彼らは地上の王たち、すなわち政府への従順をな程度で放棄しているということです。地上のいかなる政府に対する忠誠の誓いも、異邦人

や外国人には求められておらず、聖書研究家たちはこれに反対しています。それは彼らが法と秩序に反対しているからでも、自分たちが暮らす政府による規制を望まないからでもなく、彼らがすでに、より高い権威である天の主に忠誠を誓っているからです。彼らにとって、主の言葉や命令などが最優先されるのです。愛する皆さん、お願いいたします。

私たちは法律に従うべきであり、法律の下での保護を求めることはできますが、私たちの王に逆らって戦うことを強制されることはありません。私たちは、「あらゆる制度に従いなさい」（ペテロの手紙一2:13）と命じられていますが、それは私たちの良心や神の律法が侵害される場合を除きます。使徒パウロは、敬意を払うべき者に敬意と尊敬と奉仕を捧げる際の考慮事項として、正義を挙げています。

私たちは、天の父がご自身の計画と目的に従って万事を導いておられることを信頼すべきです。父は特に、愛する御子によって私たちに啓示された教えに、私たちがどのように従っているかを注視しておられます。それは私たちの日常生活に表れています。

「（その日の）火は、すべての人の行いがどのようなものであるかを試すであろう。」

（コリント人への手紙第一

8:13）。この「火」は、私たちが人生の中でどのような人格を育んできたかを明らかにするでしょう。私たちの信仰は、金、銀、宝石であると告げられている神の尊い約束の上に築かれるべきです。私たちはこの火による試練に耐えられない他の材料を用い

聖書が戦争について教えていること

て、不適切に築いてはなりません。使徒は、地上の方法や伝統に従って築かれたものはすべて滅ぼされると教えています。

天の父は、すべての国々が、自分たちだけで世界のあらゆる問題を解決できると錯覚するように許しておられます（

）。私たちは、平和が長く続いたことは一度もなく、新たな紛争が突然勃発することを目にしてきました。こうした暴力や戦争の出来事は、人類の世界を、神の永遠の平和の御国に向けて備えさせる助けとなっています。この現在の邪悪な世界の状況から、人類がキリストの御霊から遠く離れていることがわかります。

「キリストの御霊を持たない者は、キリストに属していないのです。」（ローマ人への手紙

8:9）。私たちは、これが極めて重要な原則であることを認識すべきです。

主の民は、平和の使徒となるよう主から与えられた特別な教えを心に留めなければなりません。それでは、「すべての人と平和を保ち、聖さを追い求めなさい。これがない限り、だれも主を見ることはできません。」（ヘブル人への手紙12:14）

結びの言葉

新約聖書は、イエスが暴力や戦争という概念を拒絶されたと教えています。イエスは自らの模範を示すとともに、「心を尽くして、あなたの神、主を愛せ

よ」という戒めを定め、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」と教えてくださいました。

（マタイによる福音書 22:37-39）。敵に対するこの新しい姿勢は、武力行使や殺戮を拒絶するものです。このような人格は、愛と平和を築くという原則に基づいています。

間もなく、ダビデが預言した「主は戦いをやみさせられる」（詩篇46:9）という聖書の言葉が成就するでしょう。これを実現する方法は、ミカ書4章3節に明らかにされています。「彼らは剣を鋤に、槍を鎌に打ち直す。

国は国に対して剣を振るわず、もはや戦いを学ぶこともない。」

いつの日か、地上のすべての人々は永遠の平和を知り、回復された完全な地上で、永遠に調和して暮らすことができるようになるでしょう。

いかなる形態の戦争に対しても、宗教的良心に基づく反対には、確かに聖書的な根拠が強くあります。良心的兵役拒否者として立場を表明することは個人の問題であり、個人的な研究と祈りに基づいて行うべきものです。あなたが人生においてこの極めて重大な事柄について熟考する際、天の父があなたを導き、導いてくださいますように。すべての事において主を信頼しなさい。なぜなら、主は「決してあなたを離れず、見捨てたりはしない」からです。（ヘブル人への手紙13章5節）